# 23［評論］　『言文一致体の誕生』

　明治になって、新世代の青年達が登場して来る。明治という新しい時代に、ａオウベイ由来の新しい知識を吸収して育った青年達は、彼等の心情あるいはｂシンジョウを、彼等が「語りたい」と思うような形で文章にしたいと思い、そのための文体として言文一致体の誕生を待ち望んだり、その創作に励んだりした――これがおそらくは「言文一致体誕生の経緯と背景」を語る一番手っ取り早い説明だろう。このような形で理解して、おそらくそこに間違いはないだろうが、この手っ取り早い説明は、そこに存在してしかるべき「具体的なディテール」をあまりにも省略しすぎてしまっている。だから、「言文一致体の誕生」からスタートする日本近代文学の「その後の問題」が見えなくなってしまう。あえて言ってしまえば、この「言文一致体誕生の経緯と背景」は、その後にｃフクロコウジに行き当たってしまう日本近代文学の抱える「問題」をＡしてしまうことにもなるのだ。

　明治になって「Ｂ口語文」というものが登場する。それが「話し言葉を文章にするためには苦労が伴う」ということになるのは、「話し言葉そのままでは文章にならない」という前提が隠されているからで、それはつまり「文章らしくする」ということが必要とされるからだ。「文章にすれば通る。文章らしくすれば通る。話し言葉そのままではだめ」ということはどういうことなのかというと、「文章にすればその筆者の姿は隠れるが、①話し言葉のままでは、話し手の姿が丸見えになる」ということでもある。

　書き言葉は、手紙でもなければ具体的な相手を想定しない。一方、話し言葉は常に「話しかける相手」を想定している。なんでもタメ口ですませてしまう今時の人間でもなければ、人は相手によってその話し方を使い分ける。②「──ですよね」と「──だよね」は、同じ相手に使われるものではないはずだ。だから、言文一致体の創出では「語尾の敬語の［　　　　　］」が問題になる。

　《暫らくすると、山田君の言文一致が発表された。見ると、「私は……です」の敬語調だ。自分とは別派である。ち自分は「　Ⅰ　」主義、山田君は「　Ⅱ　」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「　Ⅲ　」調を試みて見たが、どうもく行かぬとふので、「　Ⅳ　」調に定めたといふ。自分は始め、「　Ⅴ　」調でやらうかと思つて、遂に「　Ⅵ　」調にした。即ち行き方が全然反対であつたのだ。》（『余が言文一致の由来』）──ここで問題にされているのは「です」に代表される丁寧の敬語がいるかどうかという問題である。話し言葉は、常に「具体的な話し相手」を想起させてしまうようなものであるから、「その相手に対して自分はどのようなポジションに立っているのか」という配慮が必要になって来る。だからこその「〝です〟敬語は必要か否か」の議論であり、ｄモサクなのだ。「雅俗折衷体」という言葉はこの間の事情を端的に説明していて、「上品＝雅」と「下品＝俗」の二極があるから、両者の折衷＝ｅチョウセイが必要となるのだ。やがて口語文が一般化してしまえば、「語尾に丁寧の敬語があるかないか」などということはどうでもよくなってしまうが、「語尾にける丁寧の敬語の意味」は、『』と『』の二つの言文一致体小説が登場する明治二十年には、とても重要なことだった。それは、「この書き手はどこにいて、誰に向かって書いているか」を問題にすることだからである。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　波線部Ａ・Ｂの対義語をそれぞれ答えよ。4点×2

Ａ〔　　　　　〕　Ｂ〔　　　　　〕

問２　傍線部①とあるが、その理由を三五字以内で説明せよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②において、「──ですよね」と「──だよね」では相手がどのように違うか説明せよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　本文中の空欄に入る漢字二字の言葉を答えよ(ただし、本文中の言葉は用いないものとする)。6点

〔　　　　　〕

問５　本文中の「　　」Ⅰ〜Ⅵには、ア「だ」、イ「です」のどちらかが入る。適切なものを記号で答えよ。2点×6

Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕　Ⅲ〔　　　〕　Ⅳ〔　　　〕　Ⅴ〔　　　〕　Ⅵ〔　　　〕

問６　本文の内容と合致しているものを次から一つ選べ。8点

ア　二葉亭四迷の『浮雲』と山田美妙の『武蔵野』の二つの言文一致体小説は、「です」調と「だ」調を折衷することで生まれた。

イ　書き言葉は具体的な相手を想定しないが、言文一致体の創出の過程では書き手の位置や誰に向かって書くのかが問題にされた。

ウ　明治の青年達は、自らの心情を語ることのできる言文一致体の誕生を待ち望み、その創造を二葉亭四迷と山田美妙の二人に託した。

エ　明治になって登場した口語文とは、話し言葉を文章にしたものであり、そこには話し手の姿を隠そうとする意図が存在した。

オ　二葉亭四迷は、言文一致体小説を書くにあたって「です」調のスタイルこそ自分に必要だと考え、代表作『浮雲』を発表した。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ欧米　ｂ信条　ｃ袋小路　ｄ模索　ｅ調整

問１　Ａ＝暴露（露見・露顕）

　　　Ｂ＝文語文

問２　話し言葉は、話し相手に対する自分のポジションを示すことを求めるから。（34字）

　　（傍線部の内容がなければ、それぞれ5点減点）

問３　「──ですよね」は目上の相手に対する言い方であり、「──だよね」は対等もしくは目下に対する言い方。

　　（傍線部の内容が共になければ×）

問４　有無（存在）

問５　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝イ　Ⅲ＝ア　Ⅳ＝イ　Ⅴ＝イ　Ⅵ＝ア

問６　イ

■覚えておきたい語句

□8　袋小路…………………物事が行きづまること。

□8　隠蔽……………………人・物事を目につかないようにおおい、かくすこと。

□18　創出……………………物事を新しくつくり出すこと。

□24　想起……………………以前のことを思いおこすこと。

□26　模索……………………手探りで探すこと。

〔要　約〕

　段落の関係は

［1］→（［2］→）［3］→［4］

［1］段落の問題提示の答えに当たる［3］・［4］段落が柱の段落。

［3］・［4］段落を中心に、重複を削って要約する。

　　　　↓

話し言葉は常に「話しかける相手」を想定している。だから言文一致体の創出では「語尾の敬語の有無」が問題になった。『浮雲』と『武蔵野』の二つの言文一致体小説が登場する明治二十年にはそれが重要なことだった。（100字）

〈筆者＆出典〉橋本　治（はしもと・おさむ）一九四八年（昭和23）東京都生まれ。小説家、評論家。主な著作に『』『桃尻語訳　』『双調 平家物語』『ひらがな日本美術史』などがある。本文は、『失われた近代を求めてⅠ　言文一致体の誕生』（朝日新聞出版、二〇一〇年）より。

【読みのセオリー】

★対比をつかめば理解が容易になる

　評論で用いられる説明の方法の一つに対比がある。

　本文では、「話し言葉」と「書き言葉」が対比されている。対比関係がつかめると、一方が理解できていれば、もう一方はその反対と考えればよい。

　「話し言葉のままでは、話し手の姿が丸見えになる」と述べられるが、これを裏返して考えてみる。

　少々難解な表現があっても、対比関係がつかめていれば、理解の不足を補えることが多い。

■読みのセオリー［実践］対比をつかめば理解が容易になる

問２　①話し言葉のままでは、話し手の姿が丸見えになる

　　対比⇔

書き言葉では、話し手の姿が

［１　　　　　　　］

　　　　＝

具体的な相手を想定しない。

　　対比⇔

話し言葉は常に

［２　　　　　　　］

を想定している。

　　　　＝

［4］　話し言葉は、常に「具体的な話し相手」を想起させてしまうようなもの。

〔解答〕　１丸見えにならない（隠れる）　２話しかける相手

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊新問

問７　空欄１・２には対義語が入る。適切な四字の言葉を答えよ。ただし、２は本文中から抜き出せ。（いずれも15行目　空欄１「書き言葉」、空欄２「話し言葉」）

　［答］　１書き言葉　　２話し言葉

＊新問

問８　28〜29行目「口語文が一般化してしまえば、『語尾に丁寧の敬語があるかないか』などということはどうでもよくなってしまう」とは、どうなることか説明せよ。

　［答］　書き手がどこにいて、誰に向かって書いているかが問題にされなくなること。